

忠度歌集

附藏山集

完



楊の氷もあつた。なみで、けしやそのまついあはれけしと  
なつて楊花をよめる

ついでに、こゝろい物。枝のむしや高の洋場。あま

柳

ま木のほすめ、丹て、あけのこゝろ、人のちや、あむら

楊

と、あはれ、あふ、あつた、あはれ、あむら、あむら、あむら

あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら

楊花のすゝめ

あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら

楊花のすゝめ

あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら

人れや

あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら

あむら

あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら

あむら

あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら

あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら

あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら、あむら

あつたふらふらと暮らしてとて暮らしてたそとふらふらと

あつたふらふらと暮らしてとて

りあつたふらふらと暮らしてとて

夏十首

卯花

あつたふらふらと暮らしてとて

卯花露水

あつたふらふらと暮らしてとて

卯花

あつたふらふらと暮らしてとて

卯花露水

あつたふらふらと暮らしてとて

首飾

あつたふらふらと暮らしてとて

卯花

あつたふらふらと暮らしてとて

卯花露水

あつたふらふらと暮らしてとて

卯花

月夜のよきひの天にけしきしつちをさくけりや

曉十景火

秋のよきやまのうらたは院のけしきしつちをさくけりや

夕氷室

お宮さまは物やいのけしきしつちをさくけりや

秋 二十首

五秋

秋のよきやまのうらたは院のけしきしつちをさくけりや

月夜十景

月夜のよきひの天にけしきしつちをさくけりや

曉

曉のよきやまのうらたは院のけしきしつちをさくけりや

夕

夕のよきやまのうらたは院のけしきしつちをさくけりや

お宮さま

お宮さまは物やいのけしきしつちをさくけりや

お宮さまは物やいのけしきしつちをさくけりや

お宮さまは物やいのけしきしつちをさくけりや

お宮さまは物やいのけしきしつちをさくけりや





月前千也

七夜月夜半に玉の浦のまはりあはるるを  
眺まふも

秘光を照らす月夜半に玉の浦のまはりあはるるを  
眺まふも

旅夜

ふさふさの衣もあはるる月夜半に玉の浦のまはりあはるるを  
眺まふも

旅夜

ふさふさの衣もあはるる月夜半に玉の浦のまはりあはるるを  
眺まふも

急十九首

朝しはぬらぬらしむる月夜半に玉の浦のまはりあはるるを  
眺まふも

急なるもあはるる月夜半に玉の浦のまはりあはるるを  
眺まふも

互思急

あはるるもあはるる月夜半に玉の浦のまはりあはるるを  
眺まふも

急なるも

あはるるもあはるる月夜半に玉の浦のまはりあはるるを  
眺まふも

急なるも

あはるるもあはるる月夜半に玉の浦のまはりあはるるを  
眺まふも

急なるも

あはるるもあはるる月夜半に玉の浦のまはりあはるるを  
眺まふも



清くは月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

月夜を思ふに似たりしは

多き形をよきと云ふはまことなり

五言

身をてはけり人かきる女

恨むるもわらふもなほまじき心

徒らに悔恋

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

五言

雜二十首

閑寂女をよきと云ふはまことなり

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女

あはれもなきもなきもわらふ人かきる女



月日さうきては後藤さのりさの如くははまひ

よき

おれも共さうせんわねえさかをわすれん人さあつた

通

みなを頼むたぬわさあ人のわすれもさあだかたのた

まのひをわすれぬ女の心よりあつたをわす

れぬたさう人よりあひわすりひてたぬわすれ

わすれぬわすれぬたぬわすれぬわすれぬわすれぬ

わすれぬわすれぬ

わすれぬわすれぬ

わすれぬわすれぬ

わすれぬわすれぬ

わすれぬわすれぬ

わすれぬわすれぬ

わすれぬわすれぬ

わすれぬわすれぬ

わすれぬわすれぬ

わすれぬわすれぬ

ついでに其の末を記す川阿の流るる地はもと  
八幡院所系

神皇正統記の御代に公武のあはれを以て公の御方の  
わがしの御代に法鏡の心は

公の御代に法鏡の心は  
法鏡

玉皇抄方五

法鏡の心は

法鏡 二巻

法鏡の心は

法鏡の心は

法鏡の心は

法鏡の心は

此の御代に法鏡の心は  
自派河内延徳公の御代に法鏡の心は  
法鏡の心は

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or header.

Handwritten text in the upper middle section of the right page.

A small handwritten mark or character.

Handwritten text in the middle section of the right page.

Handwritten text in the lower middle section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

Handwritten text at the top of the left page, possibly a title or header.

Handwritten text in the upper middle section of the left page.

Handwritten text in the middle section of the left page.

Handwritten text in the lower middle section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

Handwritten text in the lower section of the left page.

題陳州忠烈墓

漢書卷之九十五 忠烈傳 忠烈

予一聞行表書壽永之志家慶石臣操亂士女德觀惟忠烈  
御者其奈奔騎然欲出守帝城而後行遂歸于其營而修三德家  
宅關人恐而不開門忠烈謂自名不得止而出迎於忠出平素  
誅漢公卷於鉅鹿各其公留其師公相相其慨嘆嘆也頗長談畢  
謝而出門巷上道而就此死地斯時矣有志于他憤也然卷然高  
于相公雅山夕雲之云齊云可謂行忠烈不迫之氣軍優遊漢泳之度  
量豈敢橫裂眼時之才出園斯指之公等戰死後復試御來志實山樓  
于教中而驚談千載其然避嫌而隨姓名允足以慎吾石臣之分也  
好之志矣所以後人贈之字家令而可倍聲價也今讀此家書想  
夫斯者也其哀其難自也其米之其水微彼卿也其樂其生于國之  
不忘播坤之靈其可愛可崇斯人至其賢而不入則其志也忠烈非若之















ついでに...  
...  
...

○いふ所...  
...  
...

○...  
...  
...

○...  
...  
...

○...  
...  
...

○...  
...  
...

○...  
...  
...

○...  
...  
...

○...  
...  
...

右作...  
...  
...

...  
...  
...

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

Handwritten text in the upper section of the page.

Handwritten text in the middle section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text in the lower section of the page.







其の鮮

宜旨

るまことてこをわらふんふよる所の夢を去てしり

海を去る

日未平

浦へさるるふりふりたきふりふりたきふりふりたき

海路

美しけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

竹二

天

ゆきををへんけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不

宜旨

うらむけりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不

冬不

冬不けりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不

冬不けりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不けりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不けりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不

冬不

冬不けりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不

冬不

冬不けりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不

冬不

冬不けりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不

冬不

冬不けりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不

冬不

冬不けりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不

冬不

冬不けりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬不

冬不



あつちの

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

あつちのいふにありむいふのさうはい望となくと

並

高嶺

此の書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

人信書

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

入部

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野中

茶

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

西

長岡

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

小

長

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野

長

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野

長

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野

長

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野

長

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野

長

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野

長

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野

長

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野

長

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野

長

この書は、*Shinshu* (新書) の一冊である。これは、*Shinshu* の一冊である。

野

長



一雨洗浄書

あきと敷えを不の流のよし種とあつたてし人風の打あ

セマ

成業

たふてこのこと物も賤の好端の施ふそのまじりし

セマ

入所

こまじりし人ぞいづく流の流りけりいひるよりのつとを

セマ

道旅

水鳥のけかけを契りてたえぬりて天の空をの首垂

セマ

道旅

とむけしやををたし神はあまゝまひくもつたの早ふ花よ

セマ

如人

ちきりん杯の一杯つてそのむきつてそのとも雲雀の牙

セマ

用奇

て何れもかゆのよむひまきとてかきしんたの施つて

是河津流(2)の流りてその流りてその流りて

り分の敷も好て流くも吹流も風やこの川りて

此布敷

竟真

きれ信んたしにたすの三秋のまはりてその流りて

神は

在能

たかたてぬいもたかたてぬいもたかたてぬいもたかたて

の流り

セマ

志ららぬわりのの地のまじりてその流りてその流りて

正新

セマ

秋風のまじりてその流りてその流りてその流りて

石

セマ

ていふことよすくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

明月

遊歌

は月床くやうと月入月ののまじりてその流りてその流りて

山夜

長岡

あふのこの山夜にまをさす今あふりしすきりのまを

等つふらひのこゝろをわらうのふまは月ふあつくん

あふねまをさすこゝろをわらうのふまは月ふあつくん

すしはくしんくちあふりしすきりのまを

あはむし相あふりしすきりのまを

月ふあつくん

まをさすこゝろをわらうのふまは月ふあつくん

あふのこの山夜にまをさす今あふりしすきりのまを

等つふらひのこゝろをわらうのふまは月ふあつくん

あふねまをさすこゝろをわらうのふまは月ふあつくん

すしはくしんくちあふりしすきりのまを

あはむし相あふりしすきりのまを

月ふあつくん

まをさすこゝろをわらうのふまは月ふあつくん

あふのこの山夜にまをさす今あふりしすきりのまを

等つふらひのこゝろをわらうのふまは月ふあつくん

あふねまをさすこゝろをわらうのふまは月ふあつくん

すしはくしんくちあふりしすきりのまを

あはむし相あふりしすきりのまを

月ふあつくん

まをさすこゝろをわらうのふまは月ふあつくん

あふのこの山夜にまをさす今あふりしすきりのまを

等つふらひのこゝろをわらうのふまは月ふあつくん





秋河

美領

は折らるるもたてては言はれぬものなるにほゆるもたてては

初冬時雨

松野

泥のまじりたる水あつて打寄こころのまじりたる冬をみれば

時雨

老側

まじりたる水あつて打寄こころのまじりたる冬をみれば

時雨

入阿

まじりたる水あつて打寄こころのまじりたる冬をみれば

時雨

美領

まじりたる水あつて打寄こころのまじりたる冬をみれば

時雨

松野

まじりたる水あつて打寄こころのまじりたる冬をみれば

目うけあつて初冬時雨をみれば

美領

松野

目うけあつて初冬時雨をみれば

美領

松野

目うけあつて初冬時雨をみれば

松野

美領

目うけあつて初冬時雨をみれば

松野

美領

目うけあつて初冬時雨をみれば

松野

美領

目うけあつて初冬時雨をみれば

松野

美領

目うけあつて初冬時雨をみれば

松野

美領

はらへて水なまそそむもつと夏の日のくさるようれ

成平

さだちや別てのタリサ　このうまさこゝろやこゝろかま

秋深

こゝろのふれはむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

成平

とつれはらむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

美穂

はらけりまはらけり　はらけりまはらけりまはらけり

花何

みまもむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

道敏

みまもむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

長因

みまもむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

寛風

みまもむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

成平

みまもむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

成平

みまもむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

成平

みまもむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

成平

みまもむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

成平

みまもむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

成平

みまもむらさき　はらけりまはらけりまはらけり

成平



若達を

未だ

あふくともうすけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

はしれの一わきをなすなりはしれ一わきをなすなりはしれ一わきをなすなりはしれ一わきをなすなり

共信を

茶平

こころまはばたきとていふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

先づかき

是二

あつたてんきつとていふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

まじりてんきつとていふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

あつ待を

一さき一れきとていふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

まじり待を

若死

傷のよこりていふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

進を

世論

うしろ一いふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

通達を

若死

はしれ一わきをなすなりはしれ一わきをなすなりはしれ一わきをなすなりはしれ一わきをなすなり

折達を

世論

あつたてんきつとていふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

折高進を

若死

いひ衣くさのやとていふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

折高進を

若死

あつたてんきつとていふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

折高進を

若死

あつたてんきつとていふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

折高進を

若死

あつたてんきつとていふことなりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

折高進を

若死

江蘇縣志

加別

人より能くしてたりていふことせらるるはあつたは

徳川藩

徳川

一むねのたのしみは、いふことせらるるはあつたは

比并

うらやま、むねのたのしみ、いふことせらるるはあつたは

水戸藩

水戸

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

徳川藩

徳川

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

水戸藩

水戸

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

徳川藩

徳川

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

水戸藩

水戸

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

徳川藩

徳川

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

水戸藩

水戸

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

徳川藩

徳川

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

水戸藩

水戸

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

徳川藩

徳川

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

水戸藩

水戸

いふことせらるるはあつたは、いふことせらるるはあつたは

徳川藩

徳川







あつねきし、このまゝのまゝにほくはくをみだす人のまはり

山崎道

地

うそせふもいふ事、もみじの人の友と名をさくしん

山崎文

長岡

せうのふふふふふふ、ねのふふふふふふふふふふふ

山崎道

如土

ふりまのいよとふふふふふふふふふふふふふふふ

山崎道

世目

よのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

山崎道

世目

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

山崎道

世目

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

山崎道

世目

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

山崎道

世目

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

山崎道

世目

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

山崎道

世目

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

山崎道

世目

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

山崎道

世目

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

山崎道

世目



極遊

藏山集一為方今國師之選也其人皆敏者外備編文內選  
閩關是已元公御百司策名於朝成伯攸守分符於天下者  
不與焉是選者之意而子常之序言之者審矣子變而歸之  
為對奇藻聲燦然如明珠在骨其氣曠而英華溢於外然以  
知蓋治世之音也持喪休明之世文獻日聞憐人傑士相踈  
而此各用其所能潤色大耳乃若是其前修所謂鳴國哀靈  
者非邪子於是乎有思也蓋嘗讀新集集潛疑其慷慨悲壯  
令人之骨竦然不覺溢下焉其人皆正履持相實之流而  
性之憂鬱純樸允冠映近古之然選焉哀親天聲不免一投  
廢食之 蓋世之音也人有恒言曰世道日降以子觀之  
有時而升者有與夫今日在望望車之使何矣豈也聲音與  
致道猶 抑升而帶已便是集不限以各佳之等其與顯者  
是為旋行巧者如選者所期存者非 身于亦有得也此于

之學常子常謂子曰是集也將藏焉和之康以擬名山其奉  
近世子推不事回詩而阮矣故曰好為鳥枝陰雲一語於  
亦簡偶屬于也之所美與所感會也乃不勝而答曰誣哉定  
以志  
安永乙未之秋浪華中井持善撰

作者廿九人各為

平安

景平 香川又工

延之

仙石治部

景隆

海山齋宮

傳賢 足利軒

蕭亮

小澤氏

成章

藤谷仙岩三

傳合 山縣寺

道政

梅井繁新

僧慈延

度守亮

重明 依田主水

繁尾

石田某母

比芳

林某志

世餘 八木床室門

松軒

恒藤氏

浪華

長岡

百夏氏

芝民

柳原氏

景範

器藤及柳

清藤石

秀

藤井善喜

熊

清藤及石

寛武

松本鎮人

松本鎮吉

周齋

臨門氏

大和連松

義始

西村半人

大和木津

知之

陸田理門

尾張津島

高深

伴氏

近江大幡

藤

樽井某

信濃山本

僧常地

石見高

出雲在口

光間

因田高輝

若津任印

美領

浪口高

藤中某

和可惣針二百四十二首

安永四年十一月

近江望

藏板

浪華吉野

坂段丘五新

子

の

書

